

### 30. アワビの資源動向と人工種苗放流効果

福島県水産試験場 栽培漁業部  
平成16年福島県水産試験場研究報告  
分類コード 19-05-53000000

部門名 水産業－栽培漁業－アワビ  
担当者 藤田恒雄・鈴木章一・佐々木恵一・富山 毅

#### I 新技術の解説

##### 1 要旨

- (1) 1970年以降減少していたアワビ漁獲量は、92年に最低の21 tを記録した後に回復傾向を示し、近年は40 t前後で推移している（図1）。漁獲量が回復傾向を示すと同時に、90年代前半から水揚げアワビが大型化しているが（図2, 3）、これは、天然貝の増加による資源量の増大により、漁業者が大型貝を優先的に漁獲した結果によるものである（ただし、03年には、02年によるマダコ食害により一時的に資源量が減少し、各浜とも水揚げアワビの小型化がみられた）。
- (2) 天然貝の増加は、再生産要因の好転によるものと考えられる。ただし、岩手県で報告されている冬季の水温とアワビ再生産量との関係について検討したが、本県では明確な関係は見られなかった（図4）。今後、あわびの再生産要因については多角的な検討が必要である。
- (3) 県内各地先にアワビ人工種苗貝を放流しているが、天然貝の増加による資源量増大に伴い、水揚げアワビに占める人工種苗貝の混獲率は低下傾向を示しており（図5）、放流貝の回収率、経済効果指数（人工種苗水揚げ金額／放流経費）とも大きく低下している（97年に対し04年は約2分の1）（図6）。
- (4) いわき地区では、資源の豊凶によらず、1日・1人あたりのアワビ漁獲個数を自主規制により固定しているため、天然貝の増加による人工種苗の混獲率低下は、人工種苗貝の回収率、経済効果指数の低下を招いている。栽培資源の有効利用を図るためには、固定している1日・1人あたりのアワビ漁獲個数を資源量に見合った個数に柔軟に設定していくことが必要である。また、資源の有効利用のためには、アクアラングの導入による操業の効率化を図るべきであろう。

##### 2 期待される効果

漁獲アワビの殻長が大きく、アワビ資源量が多いと判断される地先においては、1日1人あたりの制限漁獲個数を現状より増やすことで漁獲量の増大と人工種苗回収率、経済効果指数の上昇が期待できる。

##### 3 適用範囲

漁業者

##### 4 普及上の留意点

漁獲アワビの殻長が小さく、利用可能なアワビ資源が少ないと判断される地先やマダコ食害により一時的に資源量が減少した場合には、1日1人あたりの制限漁獲個数を現状維持、あるいは減らすような臨機応変な漁獲管理を指導する必要がある。

## II 具体的データ等

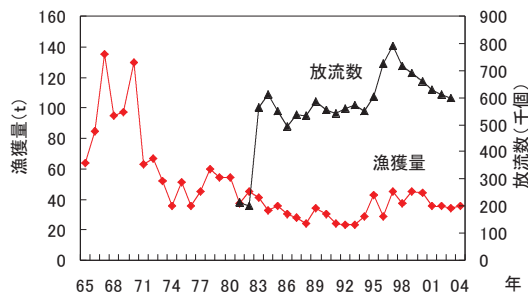


図1 福島県におけるアワビ放流数と漁獲量

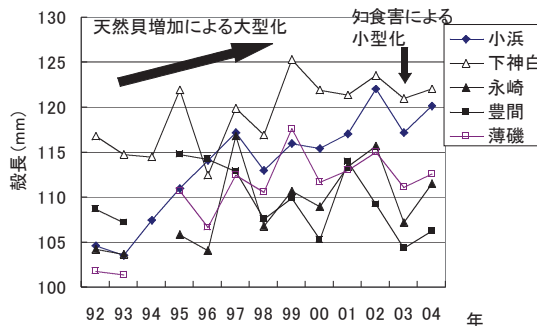


図2 水揚げアワビの年別平均殻長

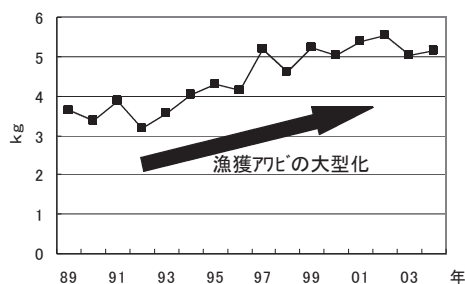


図3 いわき地区の1日・1人あたりの漁獲量

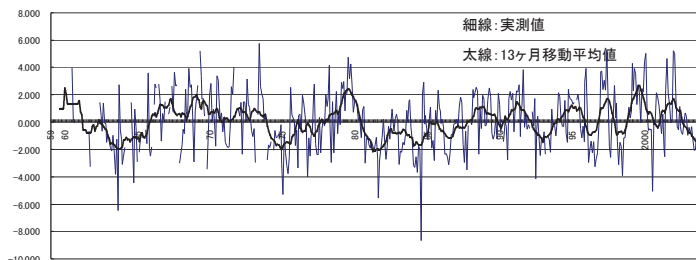


図4 塩屋崎沖3マイル地点での表面水温時系列変化

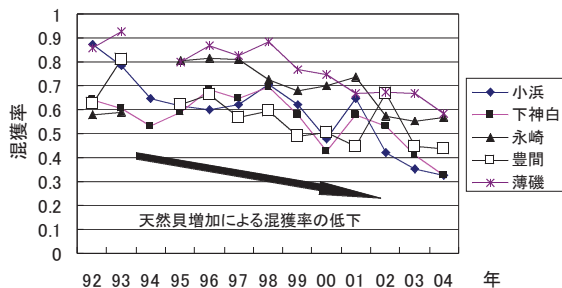


図5 放流アワビ混獲率の経年変化

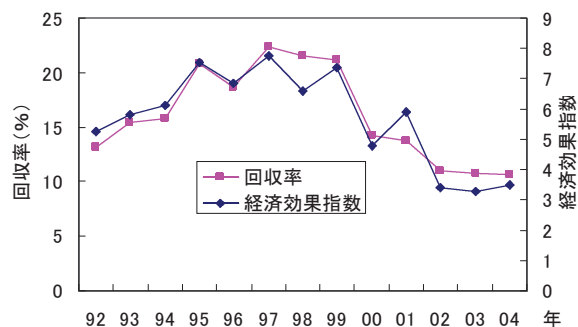


図6 放流貝回収率と経済効果指数の経年変化

## III その他

- 1 執筆者 : 藤田恒雄
- 2 その他の資料等 : (1) 福島県いわき地区における近年のアワビ資源動向と人工種苗放流効果. 福島水試研報. 12. 18-24 (2004)  
 (2) 福島県いわき地区における近年のアワビ資源動向とマダコ食害による水揚げアワビの小型化について. 水産増殖研究会報. 32. 17-24 (2004)